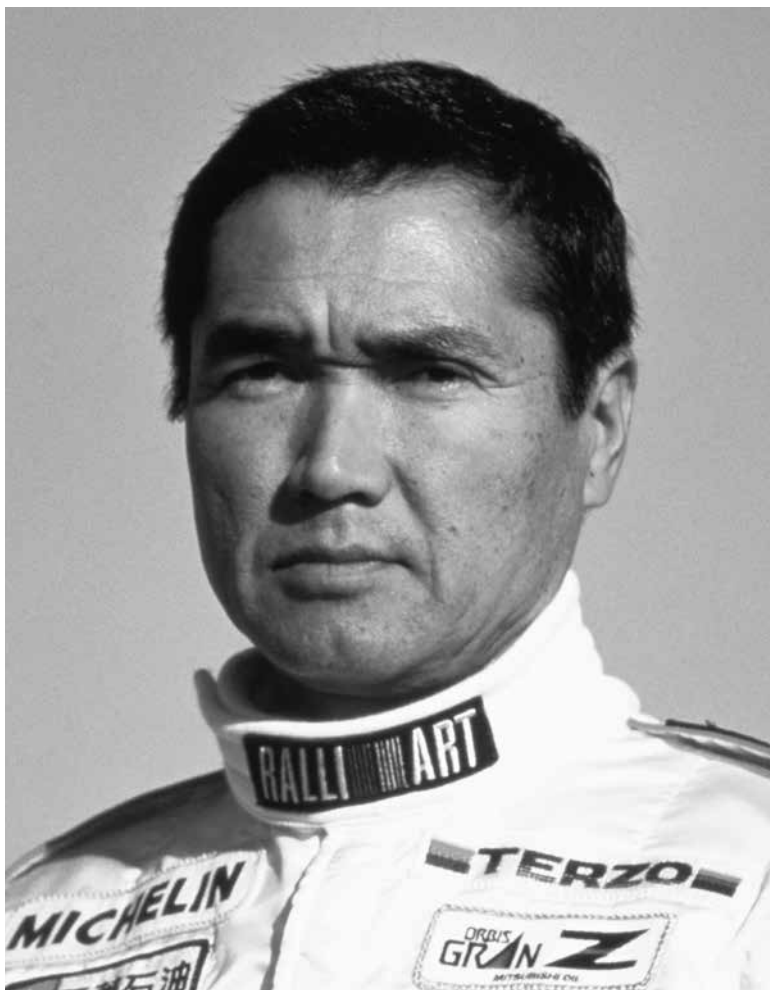


ラリードライバー

篠塚 建次郎

モータースポーツ発展に寄与した
日本人初の国際ラリー総合優勝者



篠塚建次郎(しのづか けんじろう)略歴

1948(昭和23)年11月20日 東京都大田区に生まれる
1967(昭和42)年4月 東海大学入学、ラリーを始める
1971(昭和46)年3月 東海大学工学部工業化学科を卒業
4月 三菱自動車工業に入社、社員ドライバーとして国内ラリーに出場
1974(昭和49)年 海外ラリーに進出
1986(昭和61)年 バリ・ダカール・ラリーに参戦
1991(平成3)年~1992(平成4)年 WRCコートジボワール・ラリーで日本人初の連続総合優勝
1997(平成9)年 バリ・ダカール・ラリー日本人初の総合優勝
2002(平成14)年 セネガル・ヨッフ市に小学校校舎を建設・寄贈

2008(平成20)年~2011(平成23) 東海大学学生とソーラーカーレースに参戦
4回の総合優勝記録を樹立
2013(平成25)年11月 電気自動車一充電航続距離世界記録に挑戦、ギネス記録樹立
2014(平成26)年8月 ソーラーカー世界最高速度記録を達成、ギネスに認定される
2018(平成30)年 アフリカ・エコレースに参戦、ヨッフ市を再訪
2020(令和2)年 ヨッフ市に小学校校舎を新築

受賞歴

1997(平成9)年 ベストファーザー賞
2016(平成28)年 グッドエイジャー賞

社員ドライバーとして内外のラリーに出場

篠塚建次郎氏は1948年、東京都大田区に生まれた。幼少時より、乗馬、自転車、オートバイと乗り物が好きで、東海大学に入学すると友人の誘いでナビゲーターを務めたことがきっかけでラリーに熱中するようになる。当時、毎年開かれていた日本アルペンラリーの学生アルバイトとして関わる中で、三菱自動車工業(以下三菱自動車)のラリーチームにスカウトされ、これが縁で三菱自動車に入社した。宣伝、営業、商品企画、海外関係の業務を行ないながら社員ドライバーとしてラリーに参戦し、頭角を現していく。1971年、1972年に全日本ラリー選手権で2年連続シリーズチャンピオンを獲得、1974年から海外ラリーに出場するようになり1976年のWRCサファリ・ラリーでは日本人初の6位となる。しかし1970年代は大気汚染が深刻化していく。自動車メーカー各社が排気ガス対策に重点を置くようになる中、三菱自動車も1978年、モータースポーツ活動から撤退を決断。篠塚氏はしばらくサラリーマンに専念することになる。

ダカール・ラリー、WRCで日本人初の総合優勝

篠塚建次郎氏がラリーに復帰するのはそれから8年後の1986年のことだった。俳優の夏木陽介氏とともにパリ・ダカール・ラリーに参戦。翌1987年には、三菱自動車も本腰を入れてモータースポーツ活動を再開し、篠塚氏は三菱ワークスチームのバジェロをドライブすることになる。1987年総合3位、1988年は総合2位と上位に食い込みこれが日本にRVブームを巻き起こす。以降も毎年のように6位以内に入り、参戦12年目の1997年、ダカール・アガデス・ダカール・ラリーで日本人ドライバーとして初めての総合優勝を果たした。

ダカール・ラリー以外でも篠塚氏はひろく活躍した。1988年には、アジアパシフィック・ラリー選手権(APRC)の初代チャンピオンとなり、世界ラリー選手権(WRC)では1991年のコートジボワール・ラリーでギャランVR-4をドライブして日本人ドライバーとしてWRC初優勝、翌1992年のWRCコートジボワール・ラリーでも優勝しWRC2連覇を達成し日本にWRCの存在を浸透させた。

WRCとパリ・ダカール・ラリーで優勝したのはもちろん日本人では初めてで、ラリー・ドライバーの第一人者と自他ともに認める存在となった。

1997年のダカール・ラリー総合優勝後も同ラリーに参戦し続けた篠塚氏だが、必ずしも順調ではなかった。2000年のパリ・カイロ・ラリーでは大転倒で骨折、リタイヤを余儀なされた。2002年には総合3位に食い込んだもののチーム管理責任者への転身を提示され、話し合いの末に三菱自動車を退社してフリーのプロドラ

イバーになることを選択。32年間にわたったサラリーマンドライバー生活に終止符を打った。

翌2003年には日産自動車と契約。ダカール・ラリーに参戦したがクラッシュし重篤な怪我を負う。2004年も途中リタイヤ。2005年は万全の態勢を整えて完走を目指すも転倒。4年連続リタイヤとなった。2007年のダカール・ラリーでは完走したものの総合59位と振るわなかった。2008年、モーリタニアのテロによる治安悪化でダカール・ラリーは中止となり、2009年から開催地が南米に移った。アフリカの大地を走ることにこだわりを持つ篠塚氏の名前は以来、いわゆるダカール・ラリーのエントリー・リストから消えることになる。

ソーラーカーレースで若者をサポート

ダカール・ラリーとスライドするように篠塚建次郎氏はソーラーカーレースに参戦するようになる。母校・東海大学の学生たちを支援して2008年から2011年にかけて『サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジ』と『ワールド・ソーラー・チャレンジ』に出場する。サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジは、アフリカ大陸を全長4000km以上にわたり走りぬく世界最長のソーラーカーレースで、篠塚氏は特別アドバイザーに就任、ドライバーも務め、総合優勝の達成に大きく貢献した。続いて2009年10月オーストラリア大陸のダーウィン(ノーザンテリトリー)~アデレード間の3000kmを走破する、『グローバル・グリーン・チャレンジ(ワールド・ソーラー・チャレンジから発展)』に、東海大学は新型ソーラーカー「Tokai Challenger」で出場。同レースは1987年から2年に1度開催される世界中が注目する伝統あるソーラーカーの競技会であったが、東海大学は世界最速となる100.54km/hの平均速度記録を樹立し、2位以下に2時間以上の大差を付けて優勝を飾った。2010年、サウス・アフリカン・ソーラー・チャレンジでも東海大学チャレンジセンターチームのドライバーを担当。総走行距離4061.8kmを45時間5分で走行して優勝し、2008年に次いで2連覇を達成。2011年の豪州のワールド・ソーラー・チャレンジでも2009年に続いて大会2連覇を果たした。

篠塚氏は「ダカール・ラリーなど国際ラリーで培ってきた知識と経験を伝えることで、若者たちがグローバルに視点を広げ、地球の未来を担う人材へと育つことの手助けができれば」と母校・東海大学との共同活動についての想いを語っている。おおぜいの学生たちが座学では得られない経験をし、プロジェクトを進める過程で生じる様々な壁を乗り越えることで困難に打ち勝つ強さを身につけて成長し、将来のある技術者として巣立っていくのを篠塚氏は目を細めながら見守っていた。

ソーラーカーではないが、2015年春からはクラシックカーでの「ものづくりと国際教育の融合」を目指す東京大学のプロジェクトにも参画し、貢献の場をさらに広げている。また2015年3月伝統のヒストリックラリー選手権『コスタブラバ』(スペイン)に東京大学工学部の学生たちで編成する「Team 剛」のドライバーとして挑戦。2016年は「Team MUSASHI」のドライバーで『タルガ ロトルア』(ニュージーランド)に、2017年は「Team 若武」のドライバーとして『タルガバンビーナ』に参戦している。

ソーラーカーギネス記録に挑戦

ソーラーカーとの出会いからECOカーに目覚めた篠塚氏は母校の東海大学に続いて芦屋大学や立命館大学などの学生たちとエコロジーを重視したソーラーカーやEVで『鈴鹿ソーラーカーレース』やギネス記録に挑み続ける。2013年11月には秋田県大潟村“ソーラースポーツライン”で『電気自動車一充電航続距離(途中無充電)世界記録』に挑戦。日本EVクラブが2012年4月にギネス登録した記録：1003.184kmを大幅に延ばして1300.000kmを走行。新たなギネス記録を樹立した。

さらに2014年8月、沖縄県宮古島市の空港滑走路でソーラーカー世界最高速度記録を更新する。ギネス公式認定員立ち会いのもと、それまでの世界最高速記録だった88.738km/hを破る91.332km/hを出して世界最高速記録を更新し、認定されている。

「あきらめない」、「生涯現役」で挑み続ける

篠塚建次郎氏は2007年を最後にダカール・ラリーから姿を消した後も、「生涯現役」をモットーにラリーに挑戦し続けている。

2009年夏にはモンゴル国内で開催されるラリーレイドである『ラリー・モンゴリア』に主催者側スタッフとして参加し、リタイヤしたドライバー・ナビゲーター等を收容する「カミオンバレー」の運転を担当した。大型免許を取得するところからスタートし、開催期間中はほとんど不眠不休でリタイヤしたクルマの收容作業にあたる「緑の下の力持ち」に徹した。

67歳を迎えた2015年には、『アジア・クロスカンントリー・ラリー』にスズキ・ジムニーで参戦してクラス優勝と総合2位を勝ち取り、健在ぶりをアピールした。翌2016年にも同ラリーに出場。『アジア・クロスカンントリー・ラリー』はタイ・パタヤをスタートし、同国コーcongからカンボジアに入国。アンコールワットのあるシェムリアップに入り、最終日の6日目にシェムリアップを周回しゴールするという全走行距離=約2400kmの長丁場のラリーで、2016年は2輪=46台(うち日本から25台)、4輪=20台(うち日本から8台)が出場したが、篠塚氏は総合10位、改造ガソリンクラスで優

勝した。

2018年11月に70歳の誕生日を迎えた篠塚氏だが、ダカール・ラリー挑戦から抱き続けてきた“アフリカへの思い”を再燃させ、11年ぶりにアフリカの大地を踏んだ。モナコを起点にサハラ砂漠を走りダカールを目指す『アフリカ・エコレース』に参戦。クラス2位、総合34位で完走し、後述するセネガルの首都ダカールの子供たちに文房具を届けた。

セネガルに小学校校舎寄贈など社会貢献活動を積極的に展開

篠塚建次郎氏はパリ・ダカール・ラリーで何度も訪れたセネガルの首都ダカールのヨッフ市に2002年に小学校の校舎建設費用を寄付。その後も文具を届けている。2019年には篠塚氏が在住する山梨県北杜市高根町の小学生から託された文房具を届け、ふたつの国の子供たちの交流の橋渡しを行なった。さらに日本・セネガル国交樹立60周年の2020年にはその校舎が塩害で老朽化したため、新校舎建設の費用を寄付、建設中の校舎を確認することもあわせ『アフリカ・エコレース』参戦のかたわら三たび立ち寄るなど、継続的な支援を行なっている。

篠塚氏はさらに、これまでのラリー・ドライバーとしての経験を生かし、安全運転・省エネ運転・高齢者の安全運転等の講習会や講演等を精力的に展開している。内閣府主催「交通安全指導者養成講座」の講師を務めたほか、雪道を安全に走るための初心者向けおよびスポーツドライビングのためのスクールを開催。NEXCO東日本主催の「ウィンタードライビングスクール」の講師として、北海道十勝スピードウェイや新潟県苗場スキー場を会場として雪上の安全走行を指導している。また警察やクルマのイベントでトークショーを行なったり、白バイやパトカーの隊員向けの「スノードライビングスクール」や自動車教習所教官対象の交通安全についての講演の講師として全国各地を訪れている。



篠塚建次郎氏はダカール・ラリー、世界ラリー選手権(WRC)をはじめとする過酷なラリーに数えきれないほど挑戦してきた。ラリー中、数度にわたる転倒と大きなケガ、そしてリタイヤを経験し、「もうだめだ、と思ったことも一度や二度ではなかった。しかしそのたびに周りの人たちに助けられパワーをもらい立ち上がってきた」と長いラリー人生を振り返る。その経験と達成感から得たものを若者に伝授し、多くの人々に訴え続ける活動をいまなお、続けている。

(日本自動車殿堂 研究・選考会議)



1991年のWRCコートジボワール・ラリーで日本人初の総合優勝



国内ラリーで活躍を始めた頃（東海大4年）



1987年に総合優勝したヒマラヤラリー



日本人として初の総合優勝となった1997年のパリ・ダカールラリー



2009年、世界最大のオーストラリアのソーラーカーレースで総合優勝



2014年、宮古島でソーラーカー世界最高速度記録を達成。ギネス認定書を授与された



2007年以來、12年ぶりにアフリカの大地を走ったアフリカ・エコレース



ダカールのヨッフ市に寄贈した小学校校舎



ヨッフ市の子供たちと